

ロヒール作《七秘蹟祭壇画》に見られる「反対の一致 Coincidentia oppositorum」—— マーテル・エクレスシアの図像変遷とその特質

本橋 瞳 (立教大学)

初期ネーデルラント絵画において、聖堂が表現された作品は比較的多く見受けられる。ロヒール・ファン・デル・ウェイデン (1399/1400-64) 作《七秘蹟祭壇画》には聖堂の断面図の内部に七秘蹟の諸場面と「磔刑」が描きこまれている。この聖堂空間の表現や「磔刑」群像の巨大さはよくヤン・ファン・エイク作《教会の聖母》からの影響が指摘され、この聖母にエクレスシアたる性格も見出されてきた。ロヒールの祭壇画にはヤンの作品のような、王冠を戴き豪華な衣服をまとったエクレスシアたる聖母が描かれてはいない。しかし、ザウアレンダーはこの《七秘蹟祭壇画》に関し、司教のマーテル・エクレスシアの理想的イメージの内在性に触れ、一方でブラムらはマリアの卒倒とエクレスシアの設立の関係を提示している。ところがこれまで、初期キリスト教美術時代から続くエクレスシアの図像変遷を踏襲したうえでこれらの聖堂表現を分析した研究はほとんどないのが現状といえるだろう。本発表は、エクレスシアの図像変遷とその特質を検証し、ロヒール作《七秘蹟祭壇画》を当時の神学的・歴史的背景に照らし合わせて考察することを目的とする。

考察の進行にあたり、まずエクレスシアの図像変遷を概観する。特に、聖堂とともに表現されるマーテル・エクレスシアを中心に、聖堂とエクレスシアの表現および配置方法の変遷を時代背景も考慮しながらたどってゆく。この作業によってエクレスシアがキリスト教徒のアイデンティティの一つの表象であることを確認し、さらにこのマーテル・エクレスシアでは神の家を表すのと同時に、聖堂の内外を隔てることで自他の区別化が表出されていることを提示する。

次にロヒール作《七秘蹟祭壇画》を検証する。この祭壇画では、エクレスシアのあるべき姿が聖堂内で七秘蹟を執り行う信徒として具現化され、この秘蹟が「磔刑」のイエスの恩恵から発せられるという思想が浮き彫りとなるだろう。また中央パネルの右隅の扉の外側に、髭をたくわえ松葉杖をついた男性がうつむいている。これはシナゴグを表していると思われる。聖堂内部はエクレスシア、外部はシナゴグという対比が同一祭壇画内に表現されていることを確認する。

最後に神学的・歴史的背景を考察したい。当時行われていたフィレンツェ公会議は西方・東方教会の合同公会議であり、また西洋ではフス派の暴動がたびたび起こっていた。西方と東方、正統と異端、伝統と革新といった自他を区別する表現が希求されていたと思われる。この表現の一つとしてマーテル・エクレスシアが擬人像という形態をとらず、信徒と聖堂表現でその本質を表出しているのがロヒール作《七秘蹟祭壇画》であることを提示したい。さらにこれらの二項対立が同一祭壇画に表わされる構図はニコラス・クザーヌスの「反対の一致」とその精神を同じくし、また同公会議の大勅書『エクズルターテ・デオ』にみられるエクレスシアの概念も同祭壇画と矛盾しないことを指摘したい。